

ベルガモット

1

「あとは買い忘れないかな？」

「まあ、こんなもんじゃねえか」

ヴァージニアの問いに、ギャロウズは手に抱えた大きな紙袋を覗き込んで答えた。

今の露店で買った携帯用の糧食でおつかいは終わり。銃弾も足りなくなってきたが、そちらはARMを調整に出していたクライヴがピックアップのついでに仕入れてきてくれるはずだ。

大勢の人でごったがえした市場の喧騒の中並んで歩きながら、ギャロウズはヴァージニアを横目で見やった。

いつもは青い瞳を好奇心で輝かせてキョロキョロと辺りを見渡しながら踊るように歩く彼女が、真っ直ぐ前を見つめている。

「なあ、リーダー」

「ん？」

珍しく改まった口調のギャロウズの物言いに、ヴァージニアはギャロウズを見上げた。

「ジェットと喧嘩でもしたのか？」

ヴァージニアは一瞬表情を強張らせた後、すぐに笑顔を作り直した。感情のコントロールを出来るようになったことは本来であれば褒めるべきことであるが、ヴァージニアには似合わない。

ヴァージニアはゆっくりと首を振った。いつも快活な彼女にはその仕草も似合わない。

「なんで？ そんなことないよ？」

「ならいいんだがよ」

ギャロウズは手に持った荷物を抱えなおした。

「いつもだったら、こういう買物、ジェットに付きあわせてただろ？」

「だって、いつもはジェットが暇そうなんだもん。今日はギャロウズが暇そうだったから」

ヴァージニアは笑顔をギャロウズに向けた。

——嘘だった。

ジェットと一緒にいるのがつらかったから。

いつもの喧嘩とは違う。いっその事、いつもみたいな喧嘩だったら良かったのに。おかずを取ったとか、足を踏まれたとか、そんなたわいもない喧嘩。

昨日から、ううん、気がつけばもうずっと、そんな喧嘩をしていない気がする。以前はちよつとしたことで喧嘩していたのに、最近はブツブツ言いながらもすぐに諦めてわ

たしの言う事を聞いてくれる。

ジェット一人だけ大人になっちゃったみたいで、それが少し寂しかった。

この街に来て、今日で二日目。

昨日この街に着いたとき、ヴァージニアたちの前に若い女性が飛び出してきた。波打つブロードの髪に肉感的なほつてりとした唇。見るからに豊かな胸とくびれたウエストとはりのある腰。身体のラインがよく分かるびったりとした服の胸元は大きく開き、くつきりとした谷間を覗かせていた。

ギャロウズが口笛を鳴らしたが、彼女はジェットに話しかけた。話しかけるだけじゃなくて、親しげに身体を摺り寄せていた。

以前この街に来たときに知り合っただと、後で聞いた。

「もしかして、ジェット、あの人と付き合ってるの？」
そう尋ねた。

「違う」

即座に否定されて、わたしは嬉しかったのだと思う。

けれど口から出てきた言葉は、意外にも驚きの成分の方が多かった。

「え？ どうして？ あんな美人なのに。ギャロウズが羨

ましがってたよ？」

そう言うと、ジェットは眉間に思いっきりしわを寄せた。「うるせえ。お前には関係ねえだろ」

「——ッ」

わたしには関係ない。なぜかその言葉が胸に突き刺さった。

「そんな言い方——……」

わたしには関係ない。かもしれないけど。どうして、こんなに胸が痛いんだろう……。

言い淀んで、ようやく言葉を見つけた。

「わたしたち、仲間なのにッ！」

「仲間が何の関係があるッ」

ジェットの明らかに苛立った声に、ヴァージニアはさらに声を張り上げた。

「だってッ！」

クライヴが家族と一緒にいるのを見るのが好きだった。

お父さんを思い出して、ちょっと悲しくなっちゃうけど、やっぱり一家で笑いあえる暖かい家庭が身近にあることは、わたしも嬉しい。

ギャロウズだって、好きな女が出来たと聞かされては応援して……その結果やけ酒につき合わされるのは、もうこりごりだけ。それにギャロウズのそれは演技も入っているのだと、最近気づいた。きっと元々一人の女の人に縛ら